

陳舜臣さんを語る会通信

NO.10 May 2020

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34

橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」

Tel. 078-911-1671

編集 「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員

発行日 2020年5月15日

司馬遼太郎『街道をゆく 25 (閩のみち)』に登場する陳舜臣さん

『街道をゆく 25 (閩のみち)』の初出は、「週刊朝日」1984年8月10日号から12月28日号です。『街道をゆく』全43巻のうち、陳舜臣さん絡みでは、ほか、『街道をゆく 21 (神戸・横浜散歩、芸備の道)』(本通信No. 93参照)、『街道をゆく 40 (台湾紀行)』(本通信No. 17参照)などがあります。補足■閩(びん 福建省のこと)。

司馬遼太郎氏の「閩のみち」取材旅行は1984年4月です。このときの同行者は、考古学者の森浩一教授(同志社大学)、民族学者の松原正毅助教授(国立民族学博物館)、なお、所属及び肩書きは当時、と陳舜臣氏夫妻、そして、案内役は、以前から知り合いの福建人張和平氏だった。陳舜臣さんは、1980年にも福建省を旅行されています。二度目の福建旅行ということになります。

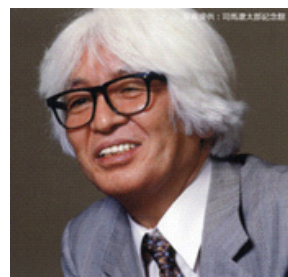
ところで、陳舜臣さんと司馬遼太郎さんの関係です。陳舜臣さんが大阪外国語学校(印度語部)に入学したのは1941年のことです。

「宣戦布告で一時は緊張したが、やがて新学年がはじまった。庄野潤三さんは卒業され、我々は二年に進級し、新一年生が入学した。この年の新入生には、司馬遼太郎(福田定一)や前衛俳句の赤尾兜子(俊郎)たちがいた。のちに終生の友となった人たちであるが、そのときは語部がちがい(司馬はモンゴル語、赤尾は中国語)、小さな学校なのでいつも顔を合わせるていどであった。(陳舜臣著『道半ば』)」

以下、陳舜臣さんについての記述がある箇所を原文引用しながら見ていきます。

なお、画像について、特に断りのないものは編集委員の撮影です。

(編集委員 橘雄三)



司馬遼太郎(1923-96)、本名は福田定一。筆名は、「司馬遷に遼(はるか)に及ばない日本の男(太郎)」から来ている。画像はNHKアーカイブスより(司馬遼太郎記念館所蔵)。

「独木舟(まるきぶね)」
『街道をゆく 閩のみち』は、二十一章からなっています。その一つ、「独木舟」の記述です。

私のこの旅は、いい仲間にもぐまれた。

まず、作家の陳舜臣夫妻である。夫妻ともに福建人であるため、かれらは何度かこの地にきている。『阿片戦争』の著者であるかれは私どもが博物館にいるあいだに、西湖の北方の林則徐(一七八五〜一八五〇)の墓所に詣でた。林則徐は、福州の人である。(中略)

林則徐の林姓も陳舜臣氏の陳姓も、福建省では、新中国以前、ある種の意味をもっていた姓である。

かつてそれらは、「衣冠族」とよばれていた。

もともと陳舜臣氏もこんなことはいわないし、現在、どういう福建人も、こんな旧時代的なことはいわないが、戦前の福建関係の文献にはしばしばしるされている。衣冠族とは、晋(三世紀から四世紀まで)のころに北方の中原から入閩した八姓を言う。嚴高の幕僚や吏僚、さらには西湖を掘った中原のひとびとも、この八姓にふくまれるのではない。林、陳のほかには、黄、鄭、詹、邱、何、胡がある。



福州 林文忠公(林則徐)祠

補足■右の文中、陳姓について、「北方の中原から入閩した八姓」の一つとあります。このことについて、陳舜臣氏ご自身、「台湾に移るまえは、福建の泉州。そのまえ、つまり陳姓の故地は河南の潁川です。祖父の墓には三十三世とあり、ぼくらの代は三十五世になります(『宝石』昭和38年9月号掲載「ある作家の周囲―陳舜臣篇」)」とおっしゃっています。遠祖は、三蔵法師と同じ陳寔(ちんじつ)のことです(『陳舜臣中国ライブラリー25』「天竺への道」)。河南省潁川は「中原」です。「中原」とは中国文化の発源たる黄河中流域を言いますが、中国人がルーツを語るとき、誰もが「中原」といい、35代といえ、千年です。その信憑性は定かではありません。

司馬遼太郎『街道をゆく 25 (閩のみち)』に登場する陳舜臣さん (続)

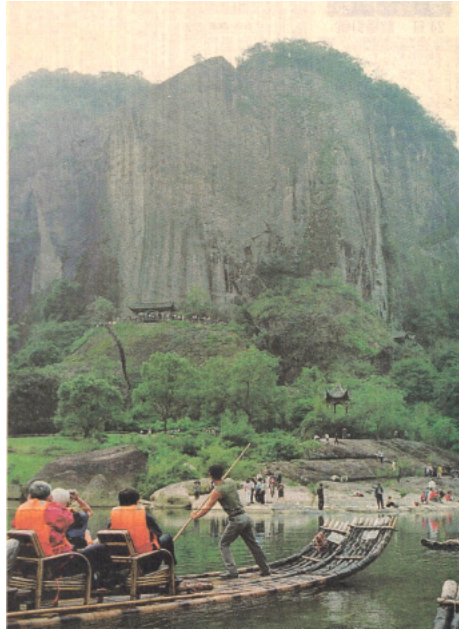
「独木舟」の続き。

武夷山脈は福建省の西部に盛りあがっている山脈で、一五〇〇メートルほどの高峰もある。西湖賓館の本館のロビーに、武夷山をえがいた中国画がかざられていた。断崖は天を摩し、下に霧が湧き、さらにはるか下を急流が奔っているという図である。武夷山は、水多く、樹木多く、さらには多種類の蛇が棲息する。福建省を閩という。門がまえの中に虫がいるが、これは蛇類(ながむし)のことであろう。武夷山には蛇の研究所もあって、陳舜臣氏はかつて訪れたことがあるそうである。

陳舜臣著『茶の話』から、少し引用します。

「一九八〇年に私が

武夷を訪れたとき、
九曲をくだるのはほとんどイカダであった。イカダのうえに、
椅子を固定させ、それに私たちは座ったのである」
陳舜臣さんは、下の画像のような経験をされたのです。



「対々の山歌」

福州北方の山中、ショー族の村(福湖村)でのことです。

「ずいぶん、この村のひとに世話になったが、お返しするものがない」といったのは、物事の気配りのいい森浩一教授である。だから陳さん、司馬さん、なにか字を書いてゆけ、といった。私は愚筆で無芸だから遠慮をし、陳舜臣氏を説得した。

あまり知られていないが、このひとは日本文壇でならぶ者のない漢詩の名手である。あるいは、中国の作家同盟のひとたちの間に入っても、この

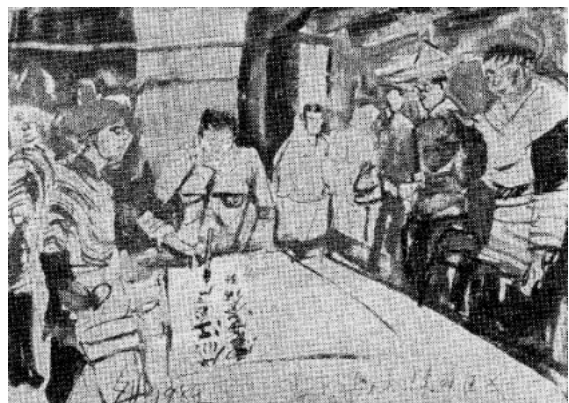
ひとはど古格な詩をつくれるひとがすくないのではあるまいか。紙が展べられ、陳氏はたちどころに筆をとった。むろん、即興である。

岱江滔滔響雷声
雲海蒼烟路幾程
対対山歌無數夢
福湖村裡過清明

岱江滔滔として 雷声響き、
雲海蒼烟、路は 幾程ぞ、対対
(ついつい)の山歌に 無數の
夢、福湖村裡清明を 過ぐ。
ショー族の歌垣のことを、べ

つに、

「対歌(ついか)」ともいう。
その「対」をとって「対々の山歌」と音感的に情景化したところが、この詩のいいところの一つである。その上、福湖村裡でのびやかに清明節の日をすごした、という結句に、俳句に似た季節感が息づいている。



『街道をゆく 25』(1985 朝日新聞社)挿絵より
「1984 書を書かれる陳舜臣氏」の書き入れあり

「雷峰を過ぐ」

司馬遼太郎さんと、案内人、福建人張和平氏の故郷についての会話。

「福建省のどこなの」

「徳化」といつてから、

「でもない。その奥です」といった。(中略)

「奥といえは？」と、きいてみた。

「雷峰。といっても、たれも知らないよ、そんな村」

「山奥？」

「虎が跳びまわっている」

こんな会話のあと、和平氏の故郷近くの町まで行くことになります。

司馬遼太郎『街道をゆく 25 (閩のみち)』に登場する陳舜臣さん (続々)



「雷峰を過ぐ」の続き

泉州北方、陶磁（やきもの）の町、徳化に着いた夜のこと。

その夜、和乎さんは表情をあらためて陳舜臣氏の部屋を訪ね、詩を乞うた。たまたま私は同室にいた。陳氏は便箋を前にしばらく考えこんでいたが、やがて「張和平君ノ郷還ヲ喜ブ」と題する七言絶句をつくった。

世務牽纏身不軽 幾年夢到徳化城
雷峰雨急樟溪乱 難撫張郎懷旧情

世務牽纏トシテ身軽カラズ（張さんはいつも仕事がまわりついていて、しかも身は軽くない）。幾年夢ミテ徳化城ニ到ル（幾年も徳化の町に帰ることを夢みて、やっとそこに来た）。

雷峰雨急ニシテ樟溪乱ル（ところが実家のある雷峰は急雨のかなたにあって見えず、足もとに樟溪の水音がかれの胸中と同様、乱れている）。撫シ

難シ張郎懷旧ノ情（われわれにはこの張君の懐旧の情をどうしてなだめたいかわからない）。

「謝謝」和乎さんは詩を拝し、やがて便箋を丁寧に折りたたんでポケットに入れた。

「土匪と械闘（どひとかいとう）」

土匪は、いわば、福建省の名物だった。とくにこの永春県の山中は、土匪の巢窟で知られていたそうである。

土匪が来れば、村びとは財物をかくして逃げる。

「僕らの子供のころ、神戸に永春うまれのひとがいてな、空襲のとき、逃げ足が素早かった。あれは永春の人間で、逃げ馴れているんだ、と大人たちは笑っていた」

と、陳舜臣氏はいった。

永春の土匪のことは陳舜臣著『道半ば』に記述があります。「永春うまれのひと」は林天俠と名前まででています。

「厦門（アモイ）兩天」

そばに、鼓浪嶼（コロンス）という岩礁がある。居留地だったむかし各国の駐在者が、それぞれのお国ぶりの別荘建築の様式をのこし、いまも保存されている（中略）。

また鼓浪嶼に最初の歴史の足跡をのこした鄭成功の記念館も厦門のどこかにあり、げんに同行の陳舜臣氏が出かけて行ったが、私は息情のほうをとった。

このまちには、厦門大学がある。私は、魯迅がすきである。この大学はかれが四十代の一時期、身をひそめていた故蹟でもある。一九二六年、北京で段祺瑞政権が反政府分子を弾圧したとき、魯迅にも逮捕状が出た。八月北京を脱出し、九月厦門大学の教授になった（以下略）。



厦門大学キャンパス

『中国歴史の旅』^{せいこうさん}「井岡山については多言を要しません」 陳さん そりゃないよ！

私の手元にある陳舜臣著『中国歴史の旅(上)(下)』は1993年毎日新聞社発行のものです。初刊は1981年4月、東方書店で、もとは、『人民中国』連載の文章です。

同著は読みやすく、大変お世話になりましたが、いくつか不満もあります。ここでは、その不満の一つにふれたいと思います。
(編集委員 橘雄三)

《1.『中国歴史の旅』下巻「江西の山とまち」から》

『中国歴史の旅』下巻は、九つの章からなっていますが、その一つ、「江西の山とまち」をとりあげます。

この章の分量は、ページ数でいうと18ページです。

冒頭、「江西省には、忘れられない山が二つあります。北の廬山と南の井岡山です」ではじまります。

まず、廬山一帯です。周の武王の時代、秦、漢、魏晉南北朝、唐、宋、元、明、清と続き、人物も、慧遠、陶淵明、李白、白居易、朱熹と多彩です。

廬山一帯から外れ、途中、景德鎮の焼き物の話が入り、次は南昌です。ここでは、八大山人、林則徐が登場し、現代に近くなって、八・一起義の周恩来、朱徳、賀竜の名が出てきます。少し南へ下がり、吉水の文天祥が登場します。

そして、下の枠内、やっと、井岡山の話が出てきたとおもったら、「井岡山については多言を要しません」と言って、あと、毛沢東の詞も含め一ページほどで終わってしまっています。「多言を要しない」とは、①「わかりきっている」「誰もが知っている」②「説明するほどの内容はない」という意味ですが、「陳さん、そりゃないよ」と言いたいです。

《2. 革命根拠地 井岡山》

井岡山については、私のホームページ、『中国の友人たち』『井岡山・瑞金への旅』をご覧ください。

私(橘)は、1997年暮れ、中国の友人と井岡山に登りました。革命根拠地は、八百数十メートルから千三百メートルほどの山岳地帯で、しかも、厳寒期だったもので、手がかじかみ、メモを取ったり、カメラのフィルムを交換したりするのが大変だったことが思い出されます。

そんな寒さ、濃霧の中、ぼんやり見える、元紅軍病院のでっかく黒い建物は異様でした。診察室、薬草室、重傷者の部屋と続きます。暗い病室に入ると、



十分な治療も受けられず、傷の痛みにも耐え、寒さに震えている傷病兵が目の前に見えるようで恐ろしくなったことを覚えております。

私には、そんな経験があるので、井岡山には思い入れが強く、「井岡山については多言を要しません」の一言で片付けられる陳さんに納得できなかったのです。

陳舜臣さんのエッセー、小説で、共産党、文化大革命、毛沢東等々をテーマにした作品は少ないように思います。陳さんがご存命なら、直接伺ってみたいところです。

■左の枠内画像は、毛沢東の詞にある黄洋界から見た雲海です。なお、このページの画像2枚は編集委員撮影です。

廬山から江西の旅を書きはじめましたが、その結びは、どうしても、もう一つの山である井岡山でなければなりません。毛主席はこの井岡山に本拠をおいて、各地に遊撃戦をくりひろげました。そして、南昌起義の朱徳軍が合流して、ここに解放軍の骨格ができたのです。一九二九年一月、国民政府軍の包圍総攻撃に、いったん井岡山は放棄され、瑞金に革命根拠地がつくられました。しかし、同年六月には、井岡山の根拠地は早くも再建されたのです。そして、一九三四年秋、長征にいたるまで、井岡山に革命の旗はひるがえりつづけていました。

井岡山については多言を要しません。ここに毛主席の「西江月 井岡山」という詞を引用するにとどめておきましょう。

西江月 井岡山

山下旌旗在望
山頭鼓角相聞

敵軍圍困萬千重

我自巋然不動

早已森嚴壁壘

更加衆志成城

黃洋界上砲聲隆

報道敵軍宵遁

山下、旌旗は望まるる在り
山頭、鼓角相聞ゆ

敵軍は困困すること万千重なれど

我は自ら巋然として動かず

早くも已に壁壘を森嚴にして

更に衆志を加えて城と成る

黄洋界上、砲声隆し

報せに道う敵軍は宵に遁げたりと

